

平岡昭利著

『アホウドリと「帝国」日本の拡大』

——南洋の島々への進出から侵略へ——

大石 太郎

最近、日本の国境周辺が何かと騒がしい。その一方で、日本人が日本の国土について正確な知識をもっているかという、かなり心許ない気がするし、そもそも領土の変遷を勉強する機会自体がほとんどないというのが現実であろう。中国との国境の最前線である沖縄は人気の観光地であり、最近では先島諸島まで足をのばす観光客も多いが、こうした島々が背負ってきた歴史に目が向けられることは少ないし、ましてや絶海の無人島である沖ノ鳥島や南鳥島にいたっては話題になることすらめったにないだろう。

本書は、離島研究や歴史地理学の分野で多くの編著を世に送り出してきた著者による、近代における日本人の太平洋進出を論じた研究書である。タイムリーな出版となったせいも、出版からまもなく全国紙に書評が掲載され^①、また地理学関係の学会誌でも書評の掲載が相次いでいる。本書のもとになった論文の一部は歴史学においても話題となり、著者自身が「はじめに」で述べているように、『史学雑誌』の学界回顧において「アホウドリ史観」と評されたこともある^②。ここでは、南太平洋の日本人移民に関する歴史地理学的調査に携わった立場から本書を検討してみたい。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに——研究の足跡と分析視角

第I部 アホウドリと日本人の無人島進出

1 アホウドリを求めて——「南進」への行為目的

2 マーカス島から南鳥島へ——発見から領有へ

3 アホウドリと尖閣諸島

4 羽毛輸出の拡大と鳥資源の減少

5 幻の島 中ノ鳥島の発見と領有

第II部 バード・ラッシュと日本人の太平洋進出

1 グアノ・ラッシュとバード・ラッシュ

——太平洋への日米の進出

2 ミッドウエー諸島の借り入れと主権問題

3 北西ハワイ諸島における一九〇四年前後の鳥類密猟事件

4 バード・ラッシュ——鳥類密猟の構図と悲劇

第III部 バード・ラッシュから無人島開拓へ

——大東諸島とその後の展開——

1 南大東島の開拓とプランテーション経営

——アホウドリからサトウキビへ

2 北大東島における開拓とその後の展開

——サトウキビ農業とリン鉱採掘

第IV部 南洋の島々への進出から侵略へ

——アホウドリから侵略へ——

1 台湾島北部の無人島への日本人の進出

——出願文書を中心として

2 東沙島への日本人の進出と西澤島事件

3 南洋群島アンガウル島への武力進出とリン鉱争奪
おわりに

「はじめに」は、約四〇年前に大東諸島を調査していた大学院生時代の著者が抱いた疑問をふりかえるところから始まる。大東諸島が伊豆諸島の八丈島の人々によつて開拓されたことは知られているが、なぜ彼らは八丈島から一二〇〇キロメートルも離れた絶海の無人島にやつてきて、二〇〇〜三〇〇メートルの断崖をよじのぼつてまで開拓に従事したのか、釈然としなかつたというのである。ここで、地理的事象の本質的な理解や理由の説明にきわめて有効であるとして、マックス・ウェーバーの行為論が簡単に紹介される。著者によれば、地理的事象は①刺激(情報)↓②人間の行為目的・動機↓③判断・行動↓④結果・地表に投影、という流れで形成され、②の行為目的・動機は行動に移る前提であるので、ここに事象の本質があるという。そして、大東諸島の調査から十数年後に八丈島をおとずれた著者は、大東諸島の開拓を指導した玉置半右衛門について再び調査をはじめることにし、その過程でアホウドリの捕獲が近代における日本人の太平洋進出の行為目的であるという仮説に至つたというわけである。

評
書
続く第I部は、アホウドリを求めて無人島に進出した日本人の活動を描いた論文五編を収める。まず、1「アホウドリを求めて——「南進」への行為目的」では、明治初期における南洋への関心の高まりおよび玉置半右衛門を中心に南進論にかかわつた人々

が論じられる。八丈島の大工であつた玉置半右衛門は明治政府による小笠原諸島の開拓にかかわり、その過程でアホウドリの利用価値を十分に認識したと思われ、無人島であつた伊豆諸島南端の鳥島開拓に積極的に取り組み、莫大な利益を手にしたことがまず明らかになる。続いて、実業家として名を成した玉置と榎本武揚や志賀重昂ら南進論を代表する人物との接点を紹介されるとともに、海洋小説や江戸時代に描かれた地図の検討を通じて、明治初期に北太平洋の無人島発見を目指す探検がさかんにおこなわれるようになった社会的背景が説明される。

2「マーカス島から南鳥島へ——発見から領有へ」では、小笠原を拠点に南洋貿易に従事していた水谷新六によるマーカス島の発見とその後の開拓が論じられる。鳥島と同様に生業がアホウドリの羽毛採取であつたことから南鳥島と命名されて日本の領土に編入されたマーカス島は、アメリカ合衆国との領土問題に発展しかつた南鳥島事件を経て、その生業がアホウドリの捕獲から鳥類はく製、グアノやリン鉱の採掘へと移り変わり、日本で最初のリン鉱採掘の島となつたことが指摘される。

3「アホウドリと尖閣諸島」の舞台は最近とみに報道をにぎわしている尖閣諸島であり、主人公は福岡県出身で那覇や石垣で商業に従事していた古賀辰四郎である。尖閣諸島に関する従来の研究は領土問題の考察が大半であり、なぜ岩ばかりの無人島に日本人が進出したのかという行為論的な問題把握はなされてこなかつたとして、著者は古賀を取り上げた先行研究の史料批判の不足を厳しく指摘しよううえで、古賀の活動に焦点をあてて検討する。そして、もともとヤコウガイに関心をもつていたらしい古賀は大東

島の開拓に失敗し、一八九二年以降、尖閣諸島のアホウドリに行
為目的を変化させていったことを指摘する。さらに、アホウドリ
が減少すると鳥は製業やカツオ漁業に活路を見出したものの、
その事業は略奪的な資源獲得に依存しており、長続きしなかつた
と結論づける。

4 「羽毛輸出の拡大と鳥資源の減少」では、まず各種統計に基
づいて明治時代における羽毛輸出の拡大が検討される。そして、
こうした公的機関が把握した統計数値は実態とかけ離れたもので
あつたことが指摘され、同業者組合の資料や業界紙等を利用して
実際には統計数値を大きく上回る輸出額であつたこと、また鳥類
保護の機運の高まりを受けて、公的機関による統計には採録され
なくなつたものの輸出は続いていたことが明らかにされる。また、
玉置半右衛門による鳥島経営のその後も検討され、さらにアホウ
ドリを求めて、榎本武揚が農商務大臣だつた際に成立した遠洋漁
業奨励法を活用してさらに南の島々へと向かつていったことが指
摘される。

5 「幻の島 中ノ鳥島の発見と領有」では、一九世紀よりヨー
ロッパ製の地図に記載されてきた疑存島のガンジス島が発見され
たとの報告を受け、存在が確認されないままに中ノ鳥島として編
入され、日本政府が公式に領有した顛末の検討を中心に、明治か
ら昭和の初めにかけて、存在すらない島の発見とその借用や払
い下げの願書が数多く提出され、さまざまの権利獲得競争がおこ
なわれてきたことが紹介される。

第Ⅱ部は日本人の中部太平洋進出とそれに伴うアメリカ合衆国
との摩擦に関する四つの章からなる。まず、1 「グアノ・ラッシ

ユとバード・ラッシュュー——太平洋への日米進出」は第Ⅱ部の導入
の役割を果たす章であり、アメリカの歴史家ジミー・M・スカッ
グスが「グアノ・ラッシュュー」と称した海鳥糞グアノの採掘を目的
としたアメリカ人による太平洋進出を簡潔に紹介し、アホウドリ
などの鳥類を求めるときの日本人による太平洋の島々への進出を
「バード・ラッシュュー」と定義する。そして、「グアノ・ラッシュュー」
と「バード・ラッシュュー」とが衝突した地点が第Ⅰ部で検討された
南鳥島であり、第Ⅱ部で検討されるミッドウエー諸島であること
が図二八(一一〇頁)で明快に示される。

2 「ミッドウエー諸島の借り入れと主権問題」では、アホウド
リを求めて中部太平洋に進出しようとする日本人と日米両政府の
対応が描かれる。ミッドウエー諸島には、すでにハワイを併合し
ていたアメリカ合衆国の主権が及んでいる可能性を日本政府は理
解しており、一方でアメリカ合衆国政府も主権は主張しながらも
日本人の居住には好意的に対応してきたことが指摘される。一九
世紀末から二〇世紀初頭にかけての比較的良好な日米関係がここ
にも反映されていることがうかがわれるが、一方でアホウドリな
ど鳥類の捕獲に対して、ハワイの世論が厳しさを増しつつあるこ
とが示唆される。

3 「北西ハワイ諸島における一九〇四年前後の鳥類密猟事件」
では、一九〇三年にアメリカ合衆国がミッドウエー諸島周辺にお
ける鳥類捕獲禁止令を発令したのちも続いた日本人の進出とそれ
にまつわる事件が描かれる。鳥類捕獲に対するハワイの厳しい世
論を受けて、在ハワイ日本人移民にまで非難が及ぶのをおそれた
在ホノルル総領事が本国政府に対応を求めていることが興味深い。

また、リシアンスキ島の鳥類密猟事件では、ハワイに連行された労働者の調書をもとに出稼ぎ労働者の出身地や職業、賃金などが明らかにされており、こうした点も移民研究の視点からの興味をそそる。

4 「バード・ラッシュ——鳥類密猟の構図と悲劇」では、中部太平洋における組織的な鳥類密猟の実態が明らかにされる。遠洋漁業奨励法による助成を受けた多くの船が、実は中部太平洋における鳥類密猟に従事していたこと、新聞記事にみられる日本漁船の遭難や日本人の無人島置き去り事件の背景にはバード・ラッシュがあったことが指摘される。

第Ⅲ部では大東諸島の開拓が扱われる。大東諸島は著者の最初のフィールドであり、詳細な現地調査に基づく迫力のある記述を読者は楽しむことができる。まず、1「南大東島の開拓とプランテーション経営——アホウドリからサトウキビへ」では、大東諸島が早くから欧米諸国に認知されていたにもかかわらず、容易に船舶が近づけない地形的制約によって無人島の状態が長く続いてきたことが冒頭で指摘される。そして、一八八五年に日本の版図に編入されて以降、鳥島でアホウドリを捕獲して莫大な利益を得た玉置半右衛門によって開拓が始められるが、アホウドリなどの鳥類は少なかつたため、サトウキビ栽培へと開拓方針が変更され、最終的には東洋製糖に売却されて独占資本によるプランテーション経営の島へと変貌していった様子が描かれる。

2「北大東島における開拓とその後の展開——サトウキビ農業とリン鉱採掘」は、南大東島と同様にサトウキビ栽培による開拓がおこなわれ、さらにはリン鉱の採掘もおこなわれた北大東島が

舞台である。北大東島は、八丈島からの草分け農民によって開墾が進められた南大東島と異なり、当初より玉置商会の直営で開墾が進められ、沖縄から大量の労働力を導入して南大東島と同様に企業島となっていたことが明らかにされる。

3「ラサ島の領土の確定とリン鉱採掘事業」では、正式には中大東島と呼ばれるラサ島におけるリン鉱採掘を中心に日本人の南洋進出が論じられる。ラサ島は一九〇〇年になって沖縄県に編入され、日本の領土となる。そして、やはり羽毛採取を目的として玉置半右衛門が借地権を得るが、彼が派遣した調査船が島の岩石を持ち帰ったことで、行為目的が鳥類捕獲からリン鉱採掘へと変化したことが指摘される。ラサ島は南北大東島と同様に単一企業島であったが、鉱夫のライフヒストリーによって描かれる当時のラサ島の様子が興味深い。

第Ⅳ部は、台湾や東沙島、旧南洋群島のアンガウル島といった現在の日本の版図からは外れている地域が舞台である。1「台湾島北部の無人島への日本人の進出——出願文書を中心として」では、一八九五年の下関条約で日本の領土となった台湾島北部にある無人島で繰り広げられた借地出願の争いとその後の顛末が論じられる。まず、台湾総督府の調査報告によって、これらの島々では農業や牧畜は難しく、漁業にしても魚が豊富な一方で断崖絶壁の海岸では輸送が難しく産業化の実現は困難であろうことが明らかにされる。しかし、山師的な人々にとってはわずかな期間であってもアホウドリなどを捕獲して利益を得られれば十分なのである。でももしない開墾を目的とした借地申請が堂々となされ、おそろくはわずかな期間のみ鳥類の捕獲をおこなってすぐ放棄さ

れ、借地許可を取り消される顛末が史料を基に描かれている。

2 「東沙島への日本人の進出と西澤島事件」では、日本人の進出の行為目的がアホウドリからグアノ・リン鉱へと転換した事例として、現在は台湾の支配下にある、南シナ海の東沙(ブラタス)島への日本人の進出が取り上げられる。東沙島へは、すでに本書に登場している玉置半右衛門や水谷新六が一九〇七年までにアホウドリを求めて進出を試みるが失敗している。本章の主人公である西澤吉治は、アホウドリの捕獲だけでなくグアノやリン鉱の採掘、さらには高瀬貝の採取も視野に入れて進出し莫大な投資をおこなうが、清朝末期の中国で対日ボイコットがおこると、西澤島と命名されていたこの島は日清間で領土問題化し、交渉の結果、企業島としての西澤島が消滅することになった顛末が描かれる。

3 「南洋群島アンガウル島への武力進出とリン鉱争奪」では、日本人の太平洋への進出の行為目的に重量のあるグアノやリン鉱が加わったことで、行為の主体がそれまでの山師的な人々ではなく独占資本に移行し、リン鉱が軍事的に重要な物資であったことから行為の主体はさらに大企業や国家へと変化したことが指摘され、その事例として南洋群島アンガウル島への武力進出が論じられる。具体的には、すでにドイツによって開発が進められていたリン鉱を第一次世界大戦に乗じて日本が占領したことにより、企業による利権争奪戦が繰り広げられ、最終的に海軍直営になった経緯が明らかにされる。激しい利権争奪戦には、司馬遼太郎の代表作『坂の上の雲』の主人公の一人として知られる秋山真之が海軍軍務局長として大きくかわっていたことが詳述されており、一般の興味もそそりそうである。

「おわりに」では、本書の成果が図五四(二六五頁)とともに簡潔にまとめられている。

本書の最大の特色はいうまでもなく、膨大な量の資料や文献に基づいて記述されている点である。それも、外交史料館や東京都公文書館などに所蔵されている史料はもちろんのこと、ハワイの地元紙を含む過去の新聞記事や各種報告書、さらには小説に至るまで多くの文献が参照されている。一次資料にたどりつけないものについては二次資料で補われている点も、当然の努力とはいえず特筆に値しよう。ただそれだけに、脚注形式ながらそこに書誌情報に掲載されておらず、さらに巻末の文献表を参照しなければならぬという、読者に多くの手間をかけさせる構成は不可解と言わざるをえない。また、わずかとはいえ文献表から欠落している引用文献が存在するのも残念である。

次に、本書は冒頭で述べたように大学院生時代の著者が抱いた疑問から始まるが、そこで興味深く感じたのは十数年後に八丈島を訪ねた著者がその地形をみて「この島の人々なら南大東島の断崖は登れると妙に納得した」(四頁)点である。なにげないことかもしれないが、現地をおとすれて景観をじっくり観察する地理学研究者ならではの指摘であろう。本書は史料や文献に基づく歴史地理学的研究であり、しかもその舞台の多くが現実におとすれることの難しい絶海の無人島なので、著者自身による現地調査や観察の成果を盛り込むことはほぼ不可能である。しかしながら、史料を十二分に活用して描かれる探検の様子はさながら映像で見ているかのように生き生きとしており、読む者を一〇〇年前の世界にいざなってくれる点も本書の魅力である。余談ながら、交通

史の知識に乏しい評者は、二〇世紀に入っても依然として帆船が探検などに広く使われていることを初めて知った。

さて、古今の文献を渉猟し、分厚い記述によつて読者を圧倒する本書であるが、気になる点も当然ある。評者が何度読み返してもよく分からず、最後まで違和感が残つたのは、大東諸島の開拓を扱う章が第Ⅲ部に位置づけられている点である。というのも、大東諸島は、日本の領土に編入されて以降、第二次世界大戦後の米軍統治下の時代を別にすればつねに日本の領土であり、かつ第Ⅱ部や第Ⅳ部で扱われる島々よりも空間的に本土に近いからである。たしかに、アホウドリの捕獲からグアノやリン鉱の採掘へと行為目的が変化し、行為の主体も山師的な人々から商業資本、さらには独占資本へと移行していったとの指摘に着目すれば、大東諸島はサトウキビ栽培やリン鉱採掘が当初から主要な産業であったことから、鳥類捕獲が行為目的であった北西ハワイ諸島への日本人の進出よりも記述が後になることは理解できなくもない。しかし、構成についてより明快な説明があつたほうが読者の理解を得られやすいのではないだろうか。

また、本書の関心からはややずれるかもしれないが、移民研究の視点からは、本書で断片的にふれられている労働者の募集や孤立した島での生活が気になる。出稼ぎ労働者に応募する立場からすると行き先はどこでもよかつたはずであり、彼らの出身地は移民を多く輩出した地域と重なる可能性が高い。実際、本書でもリシアンスキー島の鳥類密猟事件で救助された日本人の出身地として福島県信夫郡平田村（現・福島市）が目立つことが指摘され、海外移民がさかんな地域であつたことにもふれられている。ただ、

鳥類捕獲の出稼ぎがことさらに「忘却したい事実」（七頁）であり「記憶に残したくない事柄」（八頁）であつたかどうかは議論の余地があるまいか。なぜなら、沖縄県などを別にすれば、出移民ということ自体が熱心に記憶され伝承されてきたとは言いがたいからである。とはいえ、本書における出稼ぎ労働者に関する記述は、とくに日本の勢力圏内について十分に分析されていない史料が意外と残されていることを示唆しており、今後の史料のさらなる掘り起こしと研究の進展が望まれる。

最後に著者へのさらなる期待を述べてみたい。より読みやすい一般書の刊行はもちろんのこと、英文で出版すればこのテーマにおいて貴重な国際的発信となろう。それらに加えて、評者は本書で描かれた太平洋への日本人の進出を太平洋探検史に位置づける作業を期待したい。とくに北太平洋は、パナマ運河開通以前はヨーロッパや北アメリカ大陸の東海岸からもつとも遠いところであり、本書で描かれた日本人の進出が果たした役割は国際的にも大きいだろう。太平洋の探検や開発にはイギリスやアメリカはもちろんのこと、スペインやフランス、ロシア、オランダなど多くの国がかかわっており、それぞれの国の言語で書かれた史料を一人の研究者が解読するのは現実的ではない。しかし、国際的な協力が実現し、より興味深い成果が生み出されることを期待するなら、本書で描かれた日本人の活動を太平洋探検史に位置づける作業は日本からの大きな貢献になると考える。

衛星から送られてくる画像によつて居ながらにして地球のすみずみまでわかるようになり、本書で描かれたような命がけの探検をする必要がもはやなくなつた現代では、一攫千金を狙つて探検

を続ける本書の主人公たちの行動は滑稽にさえ映る。ただ、それが個人の利益を追い求めたものであったとしても、現在の日本の領土の確定には彼らの行動が大きく関与していることを本書によって知ることができる。日本の国境をめぐって周辺国・地域との摩擦が表面化している昨今、来し方を冷静に議論するためにも本書は貴重な一冊であり、多くの人に一読をお勧めしたい。

- ① 平岡昭利編『離島研究』I～IV、海青社、二〇〇三～二〇一〇年。
平岡昭利編『離島に吹くあたらしい風』海青社、二〇〇九年。平岡昭利ほか編『地図で読む百年』（全一〇冊）、古今書院、一九九七～二〇〇六年。
- ② 読売新聞二〇一三年一月三日付朝刊（星野博美による書評）、朝日新聞二〇一三年一月二十七日付朝刊（上九洋一による書評）。
- ③ 『地理空間』（五巻二号、二〇一二年）に松井圭介が、『地理学評論』（八六巻二号、二〇一三年）に須山聡が、『歴史地理学』（五五巻三号、二〇一三年）に中西僚太郎が書評を寄せている。
- ④ 鈴木勇一郎「日本（近現代）三 政治外交一（二〇〇七年の歴史学 界——回顧と展望——）」、『史学雑誌』一一七編五号、二〇〇八年。
- ⑤ カナダ史研究の第一人者であった木村和男は晩年に毛皮交易にかかわる著作を多く著しているが、次の文献で木村が描いたラッコの毛皮獲得を動機とした一八世紀の北太平洋争奪戦は、本書の関心と通じるものがあると感じる。木村和男「北太平洋の「発見」——毛皮交易とアメリカ太平洋沿岸の分割——」山川出版社、二〇〇七年。

(A5判 二七九頁 二〇一二年一月)

明石書店 税別六〇〇〇円

(関西学院大学国際学部准教授)